

京都大学教育研究振興財団助成事業
成果報告書

2024年 9月 17日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会長 藤 洋作 様

所属部局・研究科： 情報学研究科社会情報学コース

職名・学年： 博士後期課程1年

氏名： 黒澤 宗一郎

助成の種類	令和6年度 ・ 国際研究集会発表助成			
研究集会名	国際総合防災学会第14回大会			
発表形式	<input type="checkbox"/> 招待 ・ <input checked="" type="checkbox"/> 口頭 ・ <input type="checkbox"/> ポスター ・ <input type="checkbox"/> その他()			
発表題目	Study of Disaster Prevention Learning Materials Using Historical Disaster Records			
開催場所	Cartagena de Indias Convention Center			
渡航期間	2024年 8月 26日 ~ 2024年 9月 2日			
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()			
会計報告	交付を受けた助成金額	350,000 円		
	使用した助成金額	350,000 円		
	返納すべき助成金額	0 円		
	助成金の使途内訳	費目	金額(円)	
		航空運賃(一部)	310,000	
		宿泊費(一部)	40,000	
		滞在費		
		学会参加費		
その他				
	以上に助成金を充当			
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 初の国際学会参加となりましたが、無事に研究発表を終えて帰国いたしました。円安の影響により諸費用が嵩むなか、今回の助成には大変お世話になりました。御礼申し上げます。			

成果の概要／黒澤宗一郎

筆者は2024年8月26日から9月2日にかけてコロンビア・ボリーバル県カルタヘナ市に渡航した。8月28～30日に同市の Cartagena de Indias Convention Center において開催された国際総合防災学会第14回大会（The 14th International Conference of the Integrated Disaster Risk Management）に参加し、口頭による研究発表を行った。

同学会には災害リスク管理等を専門とする研究者が多数参加しており、“Disaster Resilient Communities for Life”をテーマとする今大会ではリスク軽減や総合防災、災害復興等の幅広いテーマの研究発表が行われ、活発な議論が交わされた。コロンビア政府が開催に関わっていたことから、会場には現地の防災関連機関のブースが設置され、発表会場にもその関係者が数多く参加していた点が特に印象的だった。

大会は各 Session における口頭発表のほか、複数の研究者が発表及び議論を行う Special Session、ポスター発表等によって構成されており、複数の Keynote Speech やパネルディスカッションも行われた。1回の Session には12名の発表者が参加し、発表者1人あたり質疑応答を含めて15分の発表時間が割り当てられた。Session の合間に設定されたランチタイムや Coffee Break においては、各国の研究者との議論や社交を行うことができた。

筆者の発表題目は“Study of Disaster Prevention Learning Materials Using Historical Disaster Records”であり、大会初日（8月28日）の Session 2 において口頭発表を行った。この Session 2 は “Communication and education on DRM” と題され、主に災害リスクをテーマとする防災教育に関する研究発表が行われた。他のセッションと同様オンライン含めて12名の発表者が参加しており、筆者が最初の発表者だった。この Session 2 では Hamilton Bean 氏が司会を務め、全員の口頭発表が終了した後に、参加者らから発表者への質問が行われる形式が採られていた。発表会場には先述の通り、コロンビアの現地防災当局の関係者も多数出席していた。

筆者の研究は、日本の歴史災害（ここでは、主に明治維新から第二次世界大戦終結期までに発生した自然災害を指す）の記録（災害史料）の防災教育への活用に関するものであり、歴史災害における「現代では共感的に理解することが難しい出来事や教訓」に現代の防災に潜在している問題（特に言及がタブー視されているような問題）を顕在化させる効果がある点に着目している。1854年の安政南海地震における濱口梧陵の「稲むらの火」のように、現代人でも共感的に理解できる歴史上の出来事については防災教育における活用が進んでいるが、現代とは法制度や価値観が大きく異なる時代であるがゆえに発生した、現代人には理解しがたい出来事については、これまであまり注目されてこなかった。このような題材に着目しているため、修士課程より幾度か参加してきた日本国内の学会発表においても、教材そのものの説明より研究背景や作業仮説に関する説明に時間を要した。国際学会においては、多くの国々から研究者が参加しており、日本の歴史災害に関する事前知識はもちろん、何故それが「共感的に理解することが難しいのか」という点に関する認識が、日本の

研究者のそれとは大きく異なる。また歴史災害における事例を通じて議論しようと試みる問題についても、そもそも何故それが「潜在している／タブー視されているのか」という点に疑問が呈されることが予想された。国や文化によって、どのような問題をタブー視するかは当然異なるためである。今回の発表の際にはこれまで用いてきた図版等を見直して先行研究に対する本研究の位置付けを視覚的にわかりやすく説明できるよう工夫したほか、個々の事例や教材に関する説明についてもより詳しく示すよう努めた。

続く口頭発表でも日本、イギリス、コロンビア等において実践されている様々な形態／手法による防災教育に関する研究が紹介された。用いるツールは、手紙・ハンドパペット（手にはめて用いるタイプの人形）・災害時のみならず日常生活でも用いる物品など多種多様であったが、いずれも学習者（特に子ども）が、防災に関する知識や技能を一方的に教授される受け手ではなく、主体性を持った実践者である点に着目しているものであった。

筆者が発表を行ったのは大会初日であったが、大会第2日（8月29日）には現地の防災当局の関係者から、筆者の研究についてより詳しく説明してもらいたいとの質問を受けた。口頭発表でも紹介した問題（災害時に期待される「若い力」と、ボランティアに参加する生徒・学生たちの学業への復帰の両立に関する問題）について、この問題のどのような要素が日本ではタブー視されているのかという説明が不十分であったので、この点を詳しく説明した。具体的にどのような問題がタブー視されるかは国や地域によって様々であるが「防災を考える上で避けては通れないが、制度や意識等の影響によって議論しづらい問題」そのものについては、どのような社会でも存在し得るという本研究の意義についても補足することができた。

筆者にとって、国際学会への参加及び研究発表は初めての経験だった。自身の口頭発表はもちろん、他研究者の発表聴取や議論への参加等いずれも課題は山積しているが、今後積極的に海外の研究者と関わる場に参加し、今後の研究活動に活かしていきたいとの思いを新たにした。